観天望気

ガストロノミーの街から

リーマンショックのころ、米国シカゴで暮らしていた。除草剤耐性などの遺伝子組み換え技術が進展し、不耕起栽培が進む農業を目の当たりにした。一方で、オーガニックを売りにした巨大なスーパーがあり、消費者ニーズに応える米国の市場のダイナミズムを感じた。

農業は自然環境に働きかけてその恵みをいただく産業であり、多様な農業が共存するわが国においても、有機農業や環境を保全する農業が注目されることは自然なことであろう。

10年前にUターンした故郷・鶴岡市は、1400年前に蜂子皇子（はちこのおうじ）が開いた出羽三山の麓、庄内平野の街である。ユネスコ食文化創造都市に認定されており、60種類にも及ぶ在来作物の種には、かつて山伏が持ち帰ったものもあるという。山・里・海の三つの日本遺産は全国最多であり、2020年にはSDGs未来都市に選定された。そこで、本市の持続可能な農業の取り組みを三つ紹介したい。

一つは、現下の肥料高騰を受けて注目を集めているビストロ下水道※。本市では、下水道汚泥に窒素、リン酸、カリウムが含まれていることに着目し、山形大学農学部、JA鶴岡と連携し、鶴岡コンポストとして約40年前に商品化した。

二つ目は、鶴岡市立農業経営者育成学校「SEADS（シーズ）」の開校。有機農業を含む栽培技術と経営を学ぶために、時代の変化に敏感で有機への関心が高い研修生が全国各地から集まる。

三つ目は、全国の市町村では2カ所しかない有機JAS登録認証機関の一つであること。除草技術の実証展示圃（ほ）場を設置するなど、技術の研さんに取り組んできた歴史がある。

この春、本市は「オーガニックビレッジ」を宣言した。つや姫発祥の地、また全国ブランドのだだちゃ豆の産地として、自然環境を守りながら消費者ニーズに応える街でありたい。

※下水道汚泥や熱などを資源として農業に活用する取り組み

皆川 治
鶴岡市長

みなかわ おさむ
1974年山形県生まれ。97年農林水産省入省。在シカゴ日本国総領事館領事、農林水産副大臣秘書官、食料産業局企画課課長補佐などを経て2014年農林水産省を退職。鶴岡市に帰郷後、東北公益文科大学特任講師、山形県環境審議会委員を務める。17年第3代鶴岡市長に就任。現在2期目。